

「日本留学の感想」「将来の夢」「これからの日本」

～ 2000年度渥美奨学生のパージ～

- 金 政武 「日本刀から連想して」 -----16
- 鄭 在皓 「アメニティの実現について」 -----17
- 鄭 成春 「日本の政治に関する若干の意見」 -----17
- 高 熙卓 「日本思想史研究と私」 -----18
- 林 泉忠 「日本留学の恩人たち」 -----19
- Molnar , Margit 「日本留学の思い出」 -----20
- Naiwala Pathirannehelage , Chandrasiri 「留学の経験」 -----21
- 任 永 「留学の感想」 -----22
- Suzuki Sato , Hiromi 「『ここはどこ？わたしはだれ？』
～ 増えるセミリングル・チルドレン～ 」 -----23
- 武 玉萍 「奨学生生活の充実した一年間」 -----24
- 徐 向東 「博士課程及び渥美奨学生としての一年間を振りかえって」 -----25
- 曾 支農 「『人民』、『国民』そして『日本人』」 -----26

日本刀から連想して

じん せいぶ
金 政武

東京工業大学 博士(物質科学)
物質材料研究機構ナノマテリアル研究所研究員

私は歴史と文化を一番端的に表現しているのは道具だと信じている。日本で何時も私を感心させたのが日本刀である。あの鋭い形と恐ろしい刃光から旺盛な闘志がそのまま人の心に伝わってくる。余計な飾りは一切無しで日本刀は実戦的だ。中国の刀は南北を問わず大体華やかに飾られている。皮肉なことに、韓国で私の印象に残ったのは刀自身ではなく、鞘に刻まれた華やかな模様だけであった。

研究と生活を通じて私の体験した中、日、韓の文化差がここで見られる。日本の研究者は常に実用性に目を置いて積極的に研究を進めている。ここから生まれたのは日本文化の強い行動力であり、この行動力こそ日本の近代化を成し遂げた原動力となったわけだ。中国では実用性よりも形と論議的な面を重んじる傾向が強く、物が出来る前に無意味な論争に陥って訳がわからなくなる場合が多い。これでは近代物質文明が発達するわけには行かない。鄧小平の「白い猫であれ黒い猫であれ、鼠を捕まえれば良い猫である」と言うような現実的な考えが無かったら、近年のような目覚ましい経済発展は先ず有り得ない。韓国では何時も内容より形式を重視しているような気がする。儒教が中国から起源して韓国を経て日本に伝わって来たと思うが、韓国文化はその中の形式的部分である何の実用性もない「礼儀」を吸収したが、日本はその真髄である「信用」を自分の文化の一部にしたと感じている。これは近代日本を築いた文化的基盤の非常に重要な要素となっている。中、日、韓三国の今の有様はまさにこういう文化的な差異に由来すると思う。

今まで文化と歴史の差異によって三国の間に誤解と不愉快が何度も繰り返されて来たが、これからのグローバル化時代に応じて新しい理念を持ってアジアの歴史と文化を再構築する必要性を強く感じている。これをするには先ず日本のリーダーシップが強

く求められている。日本が再びアジアに目を向けて自分をアジア諸国の一員として位置付けるべきである。中国はいわば大国主義と言う自己満足的な古い考えから脱出して積極的に先進諸国の経験を受け入れることが急務だ。韓国は自分と他人の歴史を素直に見直して如何に自己賞賛的な幼稚な精神状態から解放するのが一番重要な課題となるだろう。そうすれば少なくとも「日本が無い」と言うような偏見ばかりの本が韓国でベストセラーになることはなくなるだろう。

文化的な差異を一番敏感且つ立体的に感じているのが多種の文化をある程度高いレベルで理解している留学生である。将来彼らは必ずアジア再建の先頭に立って自分の役割を果たすはずだ。彼らは使命感を持って日本で先進技術と合理的な考え方を身に付けようと一生懸命に頑張っているが、日本政府と各民間団体の組織的な指導が必要不可欠となっている。留学生を旨く取り扱うことは日本がこれからアジアでリーダーシップを発揮する非常に重要な突破口になるわけだ。残念ながら日本政府はまだこの点を十分理解していないような気がする。留学生を単なる安い労働力として扱っている現状はあまりにも短視的だ。嬉しいことは日本でも渥美奨学財団のように留学生の役割を正しく認識している民間団体が増えつつあることである。

いくらグローバル化とは言っても、克服し難い文化と歴史的差異のため、世の中は幾つかの大きな集団に分かれて動くのは必然的である。同じ中華文化圏に所属する中、日、韓三国は近い内に一つの利益集団になって世界の一極を成すことは言うまでもない。そしてこの集団が全人類の平和と繁栄に大きく寄与できると硬く信じている。

中、日、韓三国は過去の歴史に拘っては全く意味がない。重要なのはこれから前へ向かって着実に行動することだ。

アメニティの実現について

チョン ゼホ
鄭 在皓

慶應義塾大学 博士(物質科学)

我々の生活は、日々、進歩している。それは、私たちが、現在の状況に満足せず、常に、新しい快適さ(アメニティ)と、便利な生活を望んでいるからである。そのために、企業が生まれ、人々に、より便利で快適な生活が出来るような技術を提供し、技術者達は、その実現のために、さまざまな研究開発に取りくんでいる。実際、技術者達により、様々な技術が生み出され、人々の生活は豊かなものとなってきた。しかし、一見快適になっているように見える私たちの生活は、その反面で、私たちに害を及ぼすような現象を引き起こしていると思う。我々はその事とどう向き合ってゆくべきなのだろうか？

例えば、新幹線は、より速く、人々(または物)を運ぶ、という目的は実現したものの、その沿線には騒音や振動の被害を引き起こしている。航空通行の極度の発達は、利用者に大きな便利さを与えたが、そのため、異常接近や、空中衝突などの問題を引き起こした。もっと規模の大きな例で言うと、火力発電による大気汚染や、原子力発電所の事故による原子力汚染、工業用水や生活排水等による水質汚染、また産業廃棄物による土壌の汚染などの、さまざまな環境汚染である。どれをとってみても、みな私たちの生活を快適にするための技術の代償として発生している現象ばかりである。このような物理的な事象だけではなく、人間の精神に被害を与えるという害も発生している。その一つに光技術の発達があると思う。

光は人類が持ちうる最大の無限エネルギーである。その高速性、並列性や、レーザーに至っては、コヒーレントで強度の強い光を実現できるため、様々な分野に応用できることが期待されており、現在では光通信が最も脚光を浴びている。ファイバーの研究開発がすごいスピードで進められ、光による高速通信が可能となったことにより、インターネットが爆発的に普及した。そのことにより、世の中には常に

大量の情報が流出し、いつでも好きな情報を取り出すことが出来る快適な環境が整いつつある。しかし、その反面で、過剰な情報の流出により、さまざまな事件が起こっている。ホームページ上で、劇薬を販売し、何人かを自殺に追い込んだ事件は記憶に新しい。このようなことに、我々はどう向き合ってゆけばよいのだろうか？

前者のような物理的な被害を発生させる技術に関しては、技術者の善意を信じてゆくしかないと思う。良心的な技術者達は、その技術により、大気汚染や、水質汚染などの様々な環境汚染が発生するであろうことを予測していたのではないだろうか？しかし、利潤追求第一主義の世の中では、その善意が発揮される機会がなかったのではないかと私は考える。しかし、これからは、技術者は、そのようなことよく念頭に置き、技術を開発していくことが重要である。そのよなことを改善していくのも、技術の専門家である技術者の知恵と知識が必要不可欠だからである。

次に、精神的な害に関しては、私たちが、しっかりと、自己管理をする事が重要である。どんなに情報が氾濫した状況であっても、何が正しく、何が間違っているかを常に判断できる知識と常識を持つことが大切であると思う。

一度手に入れてしまった快適さを手放すことは、なかなか出来ることではない。しかし、快適さの追求により、やむを得ず害が発生することもある。私たちが生活に快適さを求めるとき、一人一人が、自分の役割をしっかりと認識し、何をすべきかを常に把握しておくことが最も大切である。それが完全に出来るようになったとき、初めて、「本当の快適さ」を手に入れることが出来たと言えるのではないだろうか？

日本の政治に関する若干の意見

チョン ソンチュン
鄭 成春

一橋大学大学院経済学研究科

一つの国が国際舞台でどのような影響力を発揮できるかは幾つかの要素に強く依存していると思います。その幾つかの要素とは、その国が掲げている理念や思想、軍事力、経済力、それから、その国を指導する政治家のイメージだと思われます。1980年代から、世界はあらゆる分野で国際化が進み、現在では、数多くの国が足並を揃えて取り組まなければならない問題が急激に増え続けています。このような現状を踏まえて考えると、国際的な場面で一国の利益を守ると同時に、国際社会の利益を増進するための協力を引き出せる強力な指導力が何よりも強く求められていると思われます。

日本は、せめてアジア地域において、そのような国際的な指導力を発揮しようと、ずいぶん昔から努力してきたわけです。しかし、そのような努力が現在どのような成果をあげているのでしょうか。強力な経済力を自慢する日本が他のアジアの国々に与える影響力はどのくらいあるのでしょうか。確かに、経済発展のモデルとして日本は多くの貢献をしてきました。しかし、残念ながら90年代以降の長い不況の中で、そのモデルの信頼性が落ち続けているのが現状です。

軍事力はどうでしょうか。私は軍事専門家ではありませんので、日本がどのような軍事力を持っているかについて詳しいデータを持っているわけではありません。しかし、日本は核兵器を保有していないこと、軍事予算に限度があること、徴兵制が存在しないことはよく知られています。アメリカに対抗する軍事力とはとても思われません。また、日本は、自由主義、市場主義という強力なイデオロギーに抵抗できる独自のイデオロギーを持っているわけでもありません。

このような状況で、唯一残っているのは日本の政治体制だと思います。まず、日本国内での強力な指導力を発揮できる政治体制を整えることが何よりも重要な課題ではないのでしょうか。国民の信頼を受けると同時に、強力な決定権を持つ新しい政治家の登場が必要な時期に来ているのではないのでしょうか。

しかし、このような政治家の登場には準備作業が必要だと思います。現在のような合意制(?)みたいな政治制度の下では、強力な指導力を持つ政治家は育てられないからです。私が日本に来て以来、とても不思議だと思ったことですが、国民の代表を国民が選ばない、いや選べないという現実を何とか変えていくことが必要ではないかと思えます。国民から

直接選ばれない指導者に強力な指導力を期待すること自体が自己矛盾なのです。そもそもその指導者にはそのような権限が与えられていませんから、それを求めることができないと思います。現在のような首相の選び方を大胆に改革して、首相の直接選挙制を導入することはいかがでしょうか。都道府県知事は選挙を通じて選びますが、なぜ、知事より大事な仕事を行う首相は選挙を通じて選ばないのかとても不思議です。

もちろん、権限の集中には様々な危険が伴います。独裁体制、残酷な戦争、社会の急激な変化等、安定を希望する人たちにとっては好ましくない事態が発生するかもしれません。しかし、現状に不満を抱いている人、日本が国際舞台で何とか指導力を発揮して欲しいと思う人たちにとって、以上のような政治体制の変革は必要不可欠なものではないのでしょうか。日本が元気を失うことは、日本という国あるいは日本国民だけでなく、日本に留学している数多くの留学生の元気を奪うこととなります。なんとか、現在のようなただらとした日本の政治体制を大胆に変えるために、国際舞台で元気の良い日本の本来の姿を取り戻すために、究極的には日本国民のために、国民の指導者・最高権力者を国民の手で決める民主主義の最低限の基本的なルールを早急に導入することをこころから願っています。

日本思想史研究と私

コウ ヒタク
高 熙卓

東京大学大学院総合文化研究科

私が日本思想史、なかでも江戸時代の思想史に関心をもつようになったのは、一般には日本軍国主義の分析を描いた「超国家主義の論理と心理」という論文で有名な丸山真男の日本政治思想史に関する一連の研究によってである。丸山の研究は、自立した主体としての近代市民像の萌芽を江戸時代の思想のなかに見つけ、その「連続」と「断絶」の思想史を、非西欧国家のなかで近代化に成功した「唯一の国」としての日本近代の「成功」の歴史と、ファシズム化から敗戦への道をたどらざるをえなかった日本近

代の「挫折」の歴史の両面に重ねることによって、同時代の思想的課題に応えようとしたものであった。儒教をアジア的思维的の典型として捉え、それがいわゆる家父長制的秩序や開発独裁などの文化的基盤の役割を果たしていると見ていた当時の私にとって丸山の研究は大いに肯けるものであったし、朝鮮・韓国との比較文化という視点にも役立つと思われた。その意味において、批判および自己批判的視点を確保することが韓国や日本を含むアジアの思想において根本的に重要なことだという認識は今でも変わっていない。

しかし、そのような批判的視点の確保が、儒教的思维様式＝封建思想の解体だけに求められたり、あるいは国家権力や国民国家的次元の問題だけに収斂されてしまうと、一種のユーロセントリックな視点や合理主義的態度に対しては疑問をもつようになった。とりわけ、あれこれ江戸時代の思想家たちの文書を読んでいくうちに、士ならぬ民間の儒者や思想家たちにおいてもその批判的な視点は確保されており、しかもそれが儒教のいう理念的「天」に依拠することによって地上権力や身分秩序を相対化できる可能性をもっていたということに気づくようになった。これまで「時代的限界」として処理されがちだった「民間」の視点と「天」の存在は、かえって江戸時代において多様な思想・文化の開花をもたらした重要なファクターとして捉えなおさなければならない。そこには水平に広がる多様な「社会」空間と国家をも包摂した宇宙的世界などが交錯する重層的な構造が示されることはあっても、絶対化した国家と原子化した個人といった垂直に単一化された、自ら絶対者として君臨する国家像もなくそれに臣従する国民像もないということである。

たしかに、近代化のもたらしたさまざまな恩恵の側面を過小評価すべきではない。だからといって、近代化と伴われた無制限的な欲望の追求とさまざまな層における排除・疎外・侵略などのその裏面という負の側面からも目をそらすべきではないということは言うまでもない。その際、いわば近代以後のさまざまな問題の解決にもつながる歴史的想像力は、近代以前の思想・宗教・文化などへの偏見のない接近・理解を通してこそ豊かに育まれるのではないだろうか。近・現代における自他区分よりも、いろい

ろの面において現代の我々とは全面的に異なる近代以前の人々との対話にこそ真の異文化体験があるのではないかと、私には思われたのである。

日本留学の恩人たち

リム チュアン
林 泉忠

東京大学大学院国際政治研究科

南国の香港から日本へ留学してから、屈指してみれば、すでに丸 12 年の歳月が流れました。日本での勉学を終えようとしている今、過去 12 年間を振り返ると、感無量としかいいようがありません。この 12 年間の留学生生活を支えてくれたのは、数え切れぬ程多くの恩人たちです。これらの恩人たちは、学校の先生達、先輩後輩、学校外の友人達、そして奨学諸団体などです。今でも生々しく脳裏に浮かぶこれらの恩人たちとの出会いのストーリーを書きなれば、一冊では足りない位ですが、紙幅の関係上、留学 1 年目の、3 人の年配の恩人との出会いをここに記して感謝を表したいと思います。

最初に出会った年配の恩人は、初めての部屋を借りる時、保証人になって頂いた榊原久枝さんでした。榊原さんは、当時まだ 60 歳前で、「年配」と形容するのは失礼かもしれませんが。周知のことでしょうが、外国人が日本で生活する際の困難の一つとして、部屋を借りることがあります。たとえ幸い部屋を貸してくれる大家さんがいたとしても、必要となるのは日本人の保証人です。初めて日本の土を踏んだばかりの僕は、日本人の友人は一人もいないという状況でした。そこに、一度も会ったこともない友人の友人である榊原さんが保証人の話を聞いてくださり、躊躇せずに快諾頂いて、杉並区の西荻窪にある不動産屋さんまで行って下さいました。入居した直後、四畳半の私の部屋までわざわざおいで頂き、ガス台まで買って下さいました。日本語を勉強し始めたばかりの僕は、榊原さんとの会話はほとんど不可能でした。一度作ってさしあげた香港風のビーフンを喜んで食べて頂いたのは、唯一私がして差し上

げたことでした。一年後、大学への入学と引越しのためお目にかかる機会が段々なくなりましたが、ショックを受けたのは、その翌年の訃報でした。もし、まだご健在だったら、日本語が比較的うまくなった現在の僕はもっといろいろなお話ができたでしょう。茗荷台にある善仁寺に眠っておられる榊原さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

次に出会った年配の友人は、アルバイト先のパートナーでした。平成元年から5年まで吉祥寺の東急デパートの法人外商に所属する荷扱所での仕事は僕の最も長かったアルバイトでした。そこで唯一のパートナーは、すでに70歳になった榎本高保さんでした。山口淑子(李香蘭)さんと同じ年の榎本さんは、大学に行く環境に恵まれなかったのですが、戦前台湾で鉄道関係の仕事にも従事し、達筆で華道も身に付けていて実に多才でした。仕事上の指導はもちろんのこと、休憩時間の時も、日本語、そして手紙の書き方までいろいろと教えて頂き、戦前戦後の日本のお話もよく聞かせて頂きました。また、いつも昼食のおにぎりを用意して頂き、お煎餅をはじめいろいろとご馳走になりました。近年は、僕がアメリカなどでの在外研究生生活を送っていたため、あまりお目にかからなかったのですが、今年久しぶりに榎本さんご本人から年賀状のお返事を頂き、健康は若干後退されているとはいえ、一緒にいた時から杉並でやっておられた生花は現在も継続されていることを知って大変嬉しかったです。これからも相変わらずお元気で生花を続けて行ってほしいです。

日本留学初期に大変お世話になったもう一人の年配の友人は、平成2年から近年の保証人制度廃止まで、私の長年にわたる日本留学滞在中の保証人になって頂いた遠藤喜義さんです。部屋を借りるのは別に、当時の法規によって日本に滞在するすべての外国人は適切な日本人の保証人を必要とすることが法務省により定められていました。最初の一年間の日本語学校時代は、自分の学校の生徒であるため、校長自らがそれを務めて下さいましたが、一年後大学入学に伴うビザの変更で、改めて滞在上の保証人を探さなければならなくなりました。留学生の日本滞在中の全責任を負わなければならないため、保証人探しは大変難しかったです。ビザが切れる直前に、幸いにも3重の友人である遠藤さんがリスクの高い

保証人になってくださったのです。横須賀にお住まいの遠藤さんは、その熾烈な戦いで名高い硫黄島戦の参加者で、過去十数年間も、再婚、そしてガンとの戦いを経て、現在は80歳を超えた高齢にもかかわらず旺盛な生命力で硫黄島協会の会長などとしてご活躍中です。遠藤さんから学んだことは、心の広さのほかに、楽観さそして勇気でもあります。

故榊原さん、榎本さん、遠藤さんという3人の年配の恩人からの無私なる恩恵を受けられなかったら、僕の日本留学はうまくいかなかったに違いありません。そして、僕が青春を日本に賭けたことを一度も後悔しないですんだのも、まさに年配の3人をはじめとする過去12年間にお世話になった数々の恩人たちの崇高なる人間愛にほかならないでしょう。

日本留学の思い出

モルナール マルギット
Molnar Margit

慶應義塾大学(経済学)
OECD(在パリ)

私は日本に来てまず語学学校に行き、その後大学院の修士課程と博士課程の6年間を日本で過ごしました。その間、大学だけでなく沖縄から北海道まで各地を旅行して多くの人と接することが出来、日本の文化や日本人の考え方をよく知ることが出来ました。

日本に来て最初に感じたことは、日本人は親切で礼儀正しく思いやりがあるということです。旅先で道に迷った時、わざわざ途中まで付き添って案内してくれた人もいました。

分からないことにも丁寧に答えてもらったことも多いです。日本人のこうした親切さは、消費者サービスにも表れています。以前土曜日の夜に給湯設備が故障したことがあったのですが、その時はお湯が使えないと大変だからと休日にもかかわらず日曜日の朝に修理に来てくれました。こうしたことはヨーロッパでは考えられません。実際に来てくれたときは信じられないという気持ちでした。又、日本人の

留学の経験

ナイワラ パテランネヘラーゲ チャンドラシリ
Naiwala Pathirannehelage Chandrasiri

東京大学 博士（電子情報）
東京大学大学院工学系研究科助手

「思いやり」を持つという点は、「個」より「チーム」の利益を優先するという考え方（これはよく日本型経営を示す時に使われる表現ですが）に通じていると思いました。日本でアルバイトをした経験もあるのですが、その時はチームプレーの精神と共に時間や約束をきっちり守る姿勢に感心させられました。戦後短期間にこれだけの成長を成し遂げた理由を体感することができました。私は現在国際機関で働いていますが、ここでの仕事も共同作業が多いので日本で学んだチームプレーの精神は非常に役立っています。

しかし、逆に日本人は少し忙しすぎるかなとも感じました。連日夜遅くまで残業や休日出勤の多さ、休暇の取り難さなどヨーロッパの感覚では驚くことも多かったです。家庭で親子の接する時間がずれ、コミュニケーションが上手くとれなくなっている点が少し気になります。少年のいじめや犯罪が最近増加していることとも関係しているような気もしています。しかし最近では残業は減少される傾向にあり、育児休暇をきちんと取れる企業が増えたり、こうした点は最近徐々に改善されてきているように思います。そうした意味で、日本は益々生活しやすい国になっていくと期待しています。

日本での素晴らしい経験を持って、今「国際社会の中での日本」を見てみると、私は少し残念になります。それは日本人の謙遜の美德、他人を思いやる気持ちが時に国際社会で正しく理解されないことがあるからです。私は日本で生活し日本人の考え方を理解しているので、私には日本人の美德と理解できる点が、意見をはっきり持っていない人とみられてしまいます。例えば、開発政策にしても日本の援助実績は世界でも群を抜いています。人造りを大切にする人道主義的な開発理念は、もっと他国の手本となってよいと思うのですが、実績のわりに正しく評価されていないように思います。最近、私はよく職場でこうした日本の過小評価の例を見つけると、日本の側にたって弁護していることがあります。この前もサッカーの試合でつい日本を応援している自分を振り返って、日本という国がもはや外国ではないと感じている自分に気がきました。私はこれからも国際社会の中から日本と接し続けたいと思っています。

私は文部省の留学生として1990年の10月にスリランカから来日しました。そして、日本語学校、高等工業専門学校（高専）、大学と大学院まで進学する機会を得ました。多分、渥美財団の奨学生の中でもあまり例を見ない特殊なケースだと思うので、留学の経験をそれぞれの時代に分けて簡単に説明して行きます。

日本に留学する多くの学生が最初に突破しなければならない関門の一つとして日本語があります。私も最初の6ヶ月間は東京にある国際学友会日本語学校に通いました。その当時は、果たして専門の勉強の出来るレベルまで日本語を操ることが出来るかは不安でした。今になっては、当時「さようなら」という言葉しか知らなかった青年がそんな不安を持つのも無理ないと思います。2~3ヶ月が経つと学校の雰囲気にもなれ、とても充実した時間を過ごすことができました。毎日の漢字のテストは、漢字圏以外の国から来た私にとって一番難しかったのです。文法に関して言えば、母国語のシンハラ語と結構近いこともあり、それほど苦労をしなかったのです。間違っても、あまり気にしないで喋ったりしていたから会話も自然と身につけることができたと思います。日本語学校時代を振り返ってみると、とても素晴らしい思い出がいっぱいです。日本について右も左も分からなかった私たちに‘ア’から優しく教えてくださった先生方、そして共に学んだ友人について触れずに日本語学校時代を語ることはできません。

次に群馬高専時代に入りますが、文部省のプログラムでは高専の3年に編入し、5年までの3年間を勉強することになっています。大学と違ってクラスが存在し、そこで授業を受けるという形は日本語と日本の文化、特に若者の文化を学ぶのに最適な環境を与えてくれました。もちろん、自分の専門である電子情報工学の勉強もそこからスタートしました。最初は日本の漫画の文化やクラスの中で授業中寝て

いる人もいたことなどでちょっとびっくりしましたが、後に遅くまで起きていたりすると自分も思わず寝てしまったこともありました。そして、体育の時間が結構楽しかったのです。バレーボールや野球をクラスメートとやったのを今でも覚えています。勉強に関しては、数学、物理などの基礎科目についての大部分はスリランカの高校で勉強をしていましたが、コンピュータのソフトウェア・ハードウェアに関しては初めて勉強をしました。不慣れな言葉で、不慣れな分野を勉強するのがとても難しかったです。1年くらい経つと成績の方も上がってきて結果的に推薦で豊橋技術科学大学（愛知県）の3年生に無事編入学することができました。

豊橋技術科学大学には日本各地の高専から優秀な学生が集まってきました。そこで、結構高いレベルの講義を受講出来たし、私のアカデミックライフにおいて一つの重要なマイルストーンだとも良いと思います。

実習先の ATR（Advanced Telecommunication Research Institute International）で、修士・博士までの研究テーマの切っ掛けをつかむことができ、とても有益な勉強・研究の時間を過ごすことができました。

自分の研究をその分野で日本の最高レベルの研究室でしたかったため、博士課程には東京大学の原島・苗村研究室に入りました。そこで、研究と勉強に専念し、研究成果を国内外で発表し、結果的に3年間で博士号をいただくことが出来ました。

日本の中で様々な教育機関に在籍することができたことは自分にとってとても素晴らしい経験でした。その中で多くの方々、団体のお陰でここまで勉強・研究を進めることができ感謝の気持ちでいっぱいです。この有益な経験を生かしてさらに世界に羽ばたきたいと思っています。

留学の感想

任 永

群馬大学 博士（医学）
ニューヨーク州立大学医学部研究員（在バツファロー）

日本での留学生活は、今年に入りもう6年目になりました。最初に日本に留学を決意するきっかけは、やはり外の世界を見、体験したいという念願からでしたが、現在、自分の来た道を振り返ると、まるで旅のように感じます。

私は中国内モンゴルで生まれ、大学入学時に初めて電車を見ました。医科大学での5年間の学習生活は、私にとってまるで初めての外の世界を体験したとも言えます。故郷から離れ、一番大切なのはやはり友達と友情のことでしょう。大学卒業後、故郷に戻り、自治区地方病研究所で助手から講師まで10年間働いていました。日中友好交流のおかげで、試験に受かり日本に留学することが出来ました。留學生生活は、学問だけではなく、その国の社会や文化、生活習慣、人々の考え方など、いろいろな面について勉強ができて、たくさんの思い出が残っています。

生活の面では、私は大学院に入って、ほとんどの時間を研究室で過ごしていました。母国や外国の友達も多く出来ましたが、日本人学生との交流のチャンスが少ないので、友達は多く出来ませんでした。しかしながら、とても印象深く、友情を結んだ友達とは、大学から紹介されたホストファミリーの方々だと思います。このシステムは大学から、大学院に進学した外国人留学生に日本人のファミリーを紹介して、日本での留學生生活を充実させるために、特別指導という形で実施された事業です。生活面にぶつかった問題について、アドバイスをするだけでなく、休日や研究の合間を見つけて、一緒にスポーツをしたり、国際交流イベントに参加したり、大学の教育と国際協力の一環として大歓迎されています。

研究の面では、私の専門分野である医学、特に脳神経科学の方は、今のところ世界を注目させていますが、この分野での研究はかなりの難関に直面しています。しかし、大学院生としてこの様な難関をどう越えるか、ここで、私自身の非常に浅薄な感想を

述べさせていただきます。日本の医学分野の大学院教育のほとんどは正式な授業がなく、研究や学習など幾分自由度を持ち、自分で進むことを推奨していますが、研究テーマの選定では、かなりの程度、指導教官に頼らなければならないのが現実です。この大きな未知の世界に科学的に迫るためには、研究者として、特に研究者と学生の両面性を持つ大学院生として大切なことは、勉強しながら、それぞれの視点から研究を試み展開させ、分野にかかわらずお互いの知識を交換して効果的に研究を進めることだと思います。大学院生は自分の研究テーマを確実に完成させることが一番重要です。その他にもグラントの申請をすれば知識も理論も自然とつきます。また、研究室全員が各人の敷居を低くして、テクニクや情報を積極的に交流させ、自由に討論やディスカッションの雰囲気を提供し、個人の発想を重視して研究を進めることが研究課題の進行速度をより速くし、短期間に成果を上げることが出来るでしょう。

現在の科学研究はアメリカに依存することがかなり強い状態です。「自然科学の研究は、真理の探究と原理の解明にあり、いかなる社会の動乱の世においても変わることはない」とは思ってみても、そうではないこともあります。科学研究を進めるには、先進国は、まだ研究が十分に進んでいない国々も考慮に入れて研究の振興を諮ることが必要です。各国の研究レベルの違いに関わらず、ある程度平等に、かつ対等につき合うことが重要だと思います。日本を初め、アジア各国は、まず独自の、独創的な研究を次々に生み出し、アジア・ヨーロッパを中心とした世界の人々の目を向けさせ、求心力を持たせることにより、海外の優秀な人材を多く引き込み、日本やアジアの他の国での研究を希望することが必要です。特に先進国の日本は、将来的に希望する研究者に対して出来る限りの精神的、経済的な援助をすることが非常に重要な国際貢献、ひいては国際交流にもなるでしょう。

私どもは、学問だけでなく、21世紀の新しい国際関係を展望する上で、国と国の間の架け橋となって、ナショナリズムではなくインターナショナリズムを主張し、グローバルな視野でものを考え、空間的（地域差）及び時間的（歴史的変遷）な視点をもって、アジア及び世界の平和のために貢献すること

を一番考えなければならないと思います。

「ここはどこ？わたしはだれ？」 ～増えるセミリンガル・チルドレン～

スズキ サトウ ヒロミ
Suzuki Sato, Hiromi

慶応義塾大学大学院経済学研究科

以前、あるラテンアメリカの国から両親の都合で日本に来た子供の日本語教育を手伝ったことがあった。小学校低学年だったその子供には様々な事情があり、これからは「日本人」として生きていくのだということを告げられた。しかし日本語はできない、スペイン語も不完全。すなわちセミリンガルである。それだけではない。「あなたは日本人よ」といわれても外見はクラスのみなどとどこか違う。頭が混乱する。色々な疑問に対する答えを一生懸命考える。的確な導きがない限り、「ここはどこ？わたしはだれ？」状態に陥るのである。セミリンガルであることは、アイデンティティが引き裂かれつつあるか、すでにずたずたであることをも意味しているのである。

出稼ぎ労働、留学、国際結婚。親が日本に来る理由は様々あるが、親の祖国ではない日本で育つ子供達が近年増えている。親は自分の言葉を通じて自分の文化や価値観を子供に伝える。でも一歩家を出るとそこには全く異なる世界が広がっている。しかしその世界もまた、現実の世界なのである。そこでも子供は生きているのである。二つの世界は子供の中でぶつかりあい、子供を苦しめる。なんとか平和を取り戻そうと自分を探すための長い道を歩き始める。答えはすぐ見つかるかも知れない、あるいは全く見つからないかも知れない。あるドキュメンタリーで米国国籍を持つ日系四世の青年が「いざという時、国家は守ってくれないが家族は守ってくれる。自分の本当の祖国は家族である。」と述べていたが、その答えにたどり着くまで戦前渡米したひいおじいさんの故郷、日本へ旅をした。二世のおじいさん、三世のお母さん、それぞれの兄弟や従兄弟とも話し合った。皆にはそれぞれ別の答えがあった。「自分は日本

人なのだろうかなんて考えたこともない。」と言い切った従兄弟もいた。重要な点はこの青年は米国国籍をもち、英語をはなし、それを土台に日本にあるルートとそのアイデンティティをたどったことである。

親は勿論のこと大人は子供がこの大きな疑問に対する答えを見つげられるように導かなければならない。でははたして「適切」な導きとはなにかという問題が生じるが、それはやはり一つの国を基盤にするように導くことではないだろうか？どっちつかずではなく、法律的にみても、社会的に見ても、その子供が帰るべき場所がどちらかに必ずあるようにすることではないだろうか？さらにそのような状況にない子供達にも様々なアイデンティティを持つ子供達を自然に受け入れられるように教えることではないだろうか？二つの言葉を取得し、二つの文化を理解できれば、子供にとってとても強いツールとなる。それを土台にさらに複数の言葉を覚え、様々な文化があり、様々な人間がいることをより簡単に理解できよう。セミリンガルの子供達は1 + 1が1以下、最悪の場合ゼロになりかねないが、その反面1 + 1が2以上になる可能性を秘めている。そしてそれを実現するためのカギは大人が握っている。

奨学生生活の充実した一年間

武 玉萍

千葉大学 博士(医学)
千葉大学大学院医学系研究科研究員

月日の経つ早さを実感しているうちに、もう日本に来てすでに5年間経ちました。それに、日本の生活にも完全になれてきて、学業の道にもどんどん進んでいくところで、千葉大学医学部大学院の4年生の時、とても幸いに渥美国際奨学交流財団の奨学金を頂くことになりました。これは医学部の学生にとって、忙しい研究生活の中でとても助かることです。4年目は丁度今までやってきた実験の結果をまとめて卒業論文を作る時期でした。その時、妊娠していたこともわかりました。夫は私と同じように北海道大学で医学博士学位をとる最後の年でした。私は子

供が大好きで、卒業する前なのに、どうしても子供を生みたかったのです。それを決心すると同時に、やらなければならないこともいっぱい頭の中に浮かんで来て、頑張っていこうと決意しました。考えてみれば、この一年間は私の人生の中で、本当に充実し、また忙しく、思い出がたくさんあったのです。

9月頃、論文審査や発表会の準備を完了し、子供出産用のものも全部そろってきました。私は医学部を卒業したのですが、いったい自分が産婦として、どうすれば良いのか不安がたくさんありました。初めての出産だし、母はその時未だ日本に着いていなかったのです。夫は出産予定日の1カ月前から私の側に来て、精神的に私を支え、色々手伝ってくれました。いよいよ本番の日がやって来ました。母親になるための段階は私にとって、喜びもあると同時に、生まれて初めて味わった痛みでした。その時、とても感謝したい人がいました。千葉大学医学部産婦人科の先生や助産婦さんたちです。生まれる前の一番つらい時に、助産婦さんはずっと私の側にいてくれて、私の腰をマッサージしながら言葉で慰めてくれました。私はもう死ぬんじゃないかと思った時でも、彼女たちのおかげで何とか乗り越えられました。外国での出産なのに、何と彼女たちのつよくてやさしい心で、私を母親の道に導いてくれて、そして、私と夫の最愛の娘が誕生しました。今はもうそろそろ6ヵ月になって、とてもきれいで、賢くてかわいい子です。笑ったり、泣いたり、声を出したり、小さな命ですけれども、元気で活発にどんどん大きくなっていきます。私も娘と一緒に成長している気がして、知らないうちにもう母親のふりになってきました。産後、母親が中国から私を応援に来日し、子供の面倒を見てくれて、私はずっと仕事を続けることができました。愛している娘の明ちゃんにも「大きくなったら、ママを理解してちょうだいね」と言いたいです。この一年間で家族はどんなに大事なものがやっとなってわかってきました。

私は今年の3月に順調に卒業しました。博士の卒業証書を手に持ったとき、とても感激して、涙が出て来ました。ここまでできたのは、本当にたくさんの人達の支えでした。研究室の皆さんや私の友人たち、そして、奨学財団の方々は私を暖かく見守って下さり、本当にどうもありがとうございました。こ

れから私は世界のどこにいても、誰かの力になりたい、誰かに力を貸してあげたいと信じながら、やっていきたいと思っています。

博士課程及び渥美奨学生としての一年間を振り返って

じょ こうとう
徐 向東

立教大学 博士(社会学)
日経リサーチセンター研究員

近年、国家や企業組織のイノベーションの源泉として「知識」が注目されています。私は、博士課程在学中、異文化間における知識の移転、共有と創造のメカニズムの探究という問題意識から出発して、中国の人的資源形成、及び中国進出日本企業の技術移転と人材育成を研究課題としてきました。

1993年以降、日本の対中投資が急増し、日本企業の中国における異文化マネジメントは緊急課題となりました。中国では、日系企業の技術移転に対する評価が、欧米系企業と比較して相対的に低く、日本企業の対中技術移転についての研究は重要性和緊急性が増えています。また、1997年以降の深刻な通貨危機は、直接投資に依存する東アジア型経済成長の矛盾を表面化させ、技術進歩や人的資源の重要性が改めて認識させました。こうした中で、高度成長を遂げつつある中国の動向はますます注目されており、中国の持続的な経済成長を支えるべき人的資源の形成を解明する必要性が高まりました。

技術移転を考える場合に、それを制約或いは促進する要因は、技術受容側の要因と技術移転側の要因に分けられます。受容側要因は、全般的にいうと、受入国の経済的社会的環境ですが、中でも職業教育の普及や人材育成制度の整備は、多国籍企業側にとっては、コントロールできない要因のうちでも筆頭に挙げられるものです。日本企業の競争優位は生産技術における優れた人的資源の蓄積にあり、日本企業からの技術移転を議論する時、特に人的資源の形成に注目すべきです。このような視点を踏まえて、私は、職業技能における中国の人的資源形成を自分の研究課題の一つとしてきました。

他方、技術移転側の要因、つまり多国籍企業側がコントロール可能な要因は、グローバルな経営戦略や移転する技術の水準、及び技術の移転と定着に不可欠な人材育成における諸般の努力です。私は、こういった要素を知の移転、共有と創造の視点から考察し、中国進出日系企業の技術移転と人材育成をもう一つの研究課題としてきました。

このように、技術移転の受容側と移転側の二側面を統合して、「人的資源の形成と知の移転、共有と創造」を研究課題とすることによって、自己の研究の独自性を模索してきましたが、博士論文の中では、中国の職業技能教育の歴史的沿革、現状と今後の課題を解明・整理した上で、市場経済への移行期にある労働市場の流動的な状況をなるべく適確に把握しながら、中国の人的資源についての体系研究の空白を埋めようとしてきました。また、中国は独自の文化や社会システム及び技術構造をもつとの視点から、中国における日本企業の技術移転を新たな角度から捉え直して究明しようとしてきました。海外進出日本企業に関する既存研究は生産現場の技術移転の議論に偏向していましたが、知識のマネジメントについての言及が決して多くはありませんでした。私は自らのオリジナルな視点として、ロー・コンテキスト社会に見られがちな知の私事化と階層化の障害を乗り越えて、知の共有を達成するための理論的検討を模索しており、さらに日本の多国籍企業に対して新しいメカニズムを提示しようと試みましたが、つまり、日本的な「個」の組織への埋没化、或いは組織内同質化を超越した、異文化の「場」に適した自発的な知識創造メカニズムです。

さらに、以上の考察を踏まえて、日中間における技術の補完関係をも提示しようとしてきました。そして、二国間に止まらず、グローバル化や情報化の進展、及び東アジア諸国の国産技術の進化などを念頭に、日本の多国籍企業の技術移転と人材育成に対して、異文化組織における知の移転、共有と創造の新たな枠組みを提示することによって、今後の研究をさらに深化し得る理論的構築の可能性を残しておきました。

2000年は私にとって博士課程最後の年でした。幸運に渥美国際交流奨学財団奨学生に選ばれ、無事に論文の提出と審査を済まし、2001年3月に博士学

位を取得することによって、日本での留學生活に一つの区切りをつけることができました。渥美財団の色々な活動に参加することによって、異なる分野の方々とも出会い、視野がより広くなり、いろいろと貴重な経験を得ました。Malcolm 先生との英会話の時間も楽しく過ごさせていただきました。石原東京都知事の「三国人」などの差別発言に関して、奨学生の中で議論が白熱化していた時期、私が研究室で hotmail を利用していたため、関口グローバル研究会の電子掲示板をほとんど受信できず、議論には参加できなかったものの、後に読む機会があって、皆さんの正義感に溢れる発言には大変な感銘を受けました。唯一、今でも心残りなのは、学会発表のため、夏の軽井沢旅行の参加を取りやめたことです。2001年4月から、中央大学や日本労働研究機構で研究・教育をしながら、しばらくは会社勤めの生活に入りますが、これからも、財団や関口グローバル研究会の活動に参加し、皆さんとの交流を続けていきたいと思っておりますので、今後ともよろしく御願ひ申し上げます。

「人民」、「国民」そして「日本人」

そう しゅう
曾 支農

東京大学 博士（アジア文化）
東京大学東洋文化研究所外国人研究員

朱鎔基・中国國務院総理が、2000年10月に訪日された際、日本国迎賓館で在日中国人の代表(筆者もその中の一人として同席)と面会し、国際情勢、日中関係および国内現状などについての見解を述べたことがあります。その中でも、下記のようなお話がありました。

朱総理は、記者会見で日中戦争の責任についての質問に対し、「戦争的責任不應該由日本人民來負」（「戦争の責任は、日本人民が負うべきものではありません」と）と答えましたが、日本報道陣はこの言葉を報じるときに、中国語の「人民」という単語を日本語の「国民」に訳しました。香港の某新聞紙は、朱

総理の訪日活動を報道したときに、日本新聞紙の記事を引用し、その中の「国民」という単語を「日本人」と中訳して報じました。そうしましたら、世界各地にいる華人から朱総理宛てに一日平均 2000 通以上のメールが寄せられまして、彼のことを「売国奴」と猛批判したそうです。

問題はその香港系新聞紙の報道記事にあったそうです。なぜかと言いますと、その香港系新聞紙の報道によりますと、朱総理の言葉は「戦争的責任不應該由日本人民來負」（「戦争の責任は、日本人が負うべきものではありません」と）となってしまう、中国人の目からみれば、もしその戦争の責任を日本人が負うべからずならば、一体誰がその責任を負うべきか？ まして我々中国人がその責任を負うべきなのか？と理解してしまうのです。一国の首相として、このような失言をしたら、その国の人々に「売国奴」と指摘されても無理はありません。しかしながら、朱総理は確かに「日本人民」と言っており、「日本人」という言葉を使っておられませんでした。ですから、彼は無実の「罪」を被われたので、当然、災いを引き起こしたその新聞社は謝罪したそうです。

ところで、なぜこんなことになってしまったかと言いますと、言葉に対する理解の差異にあったのではないかと考えられます。朱総理の解釈によりますと、自分が使った「日本人民」という言葉は、ただ人類的・社会的な概念ではなく、政治的な意味をも含んでおり、要するに我々中国人の習慣なら「人民」と言う場合、日本の一般的な国民を指し、当然あの戦争を引き起こした軍国主義者の日本人を排した概念であり、両者の間ではっきり区別をつけたはずだ、としております。

一方で、日本の習慣では、普段「国民」という言葉を使っており、「人民」という言葉はあまり使われておらず、故に朱総理の「人民」という言い方を「国民」に和訳したようです。

香港は百年以上もイギリスの植民地であったために、その新聞社が、社会主義風の「人民」という言葉を使わずに、「国民」という日本語を、「日本人」と中訳したらしいのです。問題の肝心は、同じ中国語になると、香港新聞紙による「日本人」と朱総理による「日本人民」との表現は、中国人の考えとして、明らかに違う意味を表しているということです。

では、「人民」、「国民」、「日本人」といった単語は、中国語と日本語の中で、一体どう違うのかと調べてみました。

中国語辞書の中で「人民」に対して、「在不同的国家和各個国家的不同的歷史時期，有着不同的内容」（異なる国およびその国における異なる時期において解釈が違う）、というふうに解釈しており、即ち、A国にとって「人民」になる階層はB国の目から見れば「人民」ではなく、また同じ国であっても、ある時期において「人民」となる階層は、違う時期になると「人民」ではなくなるということです。簡単にいえば、朱総理のおっしゃった通りに中国語の「人民」というのは、その国の人々の中の「味方」といった一部分を指しており、「敵」とみなされる階層や人々は当然「人民」の中に含まれておりません。飽くまでも社会的というよりは、政治的なニュアンスを表しています。一方で、日本語の中での「人民」は、「社会を構成している人々。特に、政府の支配下にある人々」と解釈されており、「味方」か「敵」かといった区別をつけておりません。

「国民」に対する解釈でも、中国語と日本語とはニュアンスが違います。中国語の場合、「本国的人民」（「本国の人民」と、「指具有本国国籍的人」（「その国の国籍を有する人を指す」と、二種類の意味を含んでおり、日本語の場合は、「その国の統治権の下にあって、その国を構成する人々。その国の国籍を有している人」というふうに解釈し、日本語の「人民」と同じ意味になっております。

「日本人」という単語は、中国語の中でも日本語の中でも、同じく「日本国籍を持ち、日本語を母国語とする人」と解釈しています。

総じてみれば、日本語の中で「人民」・「国民」・「日本人」といったら、同じことを意味すると理解していいですが、一方で、中国語の中では、そういった三つの言葉には共通点(日本国籍を持つ人々)もあれば、それぞれ違う意味(「人民」は「日本人」の中の一部のみ)が出てくるわけです。この辺の差異をはっきりしないと、冒頭のような誤解が生じてしまうのです。この例から、異文化間の交流や、それぞれの国の事情・歴史・文化に対する深い理解が如何に重要かと分かり、また異文化交流の最先端に立つ我々留学生が、世界の平和と発展に貢献できること

を確信しております。